よしかわ

令和3年9月1日 現在
総世帯数　8,096世帯
総人口　17,449人
男　8,780人
女　8,669人

芳川地区
地域づくりセンター
☎58-2034
芳川出張所
☎58-2034
芳川公民館
☎58-2034
芳川福祉ひろば
☎57-0168
※芳川地区地域づくりセンター、芳川出張所、芳川公民館へのご連絡は同じ番号となります。

にじいろ工場のパフォーマンス

8月7日(土)に芳川体育館で「集まれ！よしかわKIDs」と題し、芳川地域づくり協議会青少年育成部会によるパントマイムショーを開催しました。毎年お越しいただいているカナイ・ケイスケさんがパラリンピックの演出の都合で来ることができませんでしたが、ご推薦をいただいた「にじいろ工場」のながっぱさんとチョコさんをお招きし、楽しいひと時を過ごしました。

パントマイムやバルーンアート、紙芝居など次から次へと会場を魅了しました。

お二人にパントマイムを会場で教えてもらい、子どもたちもチャレンジ！みんな目の前の壁やドアを作り、中にはプロ顔負けのパフォーマーも！

何が飛び出すかわからないパフォーマンスに、子どもたちは終始目を輝かせ、拍手喝采で幕を閉じました。

※にじいろ工場は長野県を拠点に活動しているアーティストです。

小学校4～6年生夏休み特別講座

夏休み少人数講座を芳川公民館・子ども会育成会で主催しました。

コロナ禍で、大勢で集まることができず、恒例のVS芳川マッチも中止となり、何かできないかと考える中で企画しました。

4つの体験型講座を6日程で開催し、申込みも24時間できるようQRコードを使いました

①ソーラーライトを作ろう（講師：パナソニック株式会社のみなさん）
②最新のプロジェクターとスマートグラスのお話（講師：村井町 鈴木 嗣(あきら)町会長さん）
③まが玉づくり教室（考古博物館の職員）
④知ってなっとく！SDGs！（公認ファシリテーター 丸山 亜希さん）

どの講座も真剣に学ぶまなざしや夢中になって取り組む姿が印象的でした。

①ソーラーライトを作ろうに参加した芳川小学校5年生は「身近なものが再生可能エネルギーになることなど勉強になった」と声を弾ませていました。

今夏も筑中自習室

地域の子どもを学校と協力して育てるための「コミュニティ・スクール事業」の一環として、2年目となった筑中生の長期休暇期間の公民館開放事業。芳川公民館では、筑中生に公民館の一室を開放しました。

7月26日から8月19日まで、冷房の効いた部屋で、筑中生が思い思いの課題にチャレンジ。利用者数は延べ123人でした。昨年度は84人の利用者であったので、公民館という施設が中学生にも浸透してきている様子。

「昨年も来たけど、涼しくて、集中して勉強ができる」、「受験に向けて、勉強を日課にできる」と勉強の邪魔をしない程度にインタビュー。

今年は、コロナ禍ということもあり、3密を避けての開放となりましたが、将来は、高校生、中学生、小学生が自由に集い、下の学年の学習支援をしたり、地域の大人が相談に乗ったり、体験を語ったりできるような場となればよいですね。

芳川 シニア短期大学

講師：柏澤由紀一

Vol.5

北海道庁長官の元で感化事業に取り組む

（出典）「小池九一」シリーズ 福祉に生きる42（大空社）

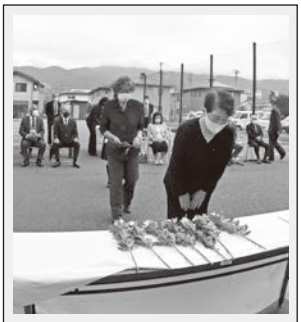
北海道庁空知支所長山田有斌（ありたけ）の知人に同志社の新島襄（じょう）の片腕として活躍した金森通倫（みちとも）という人がいます。九一を紹介された金森は、明治35年６月に逓信省から「貯金のすすめ」という著書を出し、その中で九一が紙店に奉公しながら慈善貯金をしたことを全国に紹介したのです。

時の北海道長官、園田安賢男爵は、この本を読んで九一の行いに感動し、山田にかけあって、九一夫妻を自らの官邸に住まわせました。北海道庁職員になったのです。39年に園田が宮中顧問に栄典すると九一夫妻は、札幌市内に初めて自らの居を構えました。

明治政府は、30年代になると「不幸な家庭環境が主な原因となって落伍してゆく子どもたちを救う」感化事業に着手、41年には各道府県に「感化院」の設置を義務付けました。

九一は早くから感化事業に関心を持ち、自ら講習会に学ぶなど、自らの体験に照らして、これこそ自分が取り組む仕事だという決意を固めていました。北海道庁立感化院の設立にあたって、園田の後任の河島長官が九一に白羽の矢をたてたのは言うまでもありません。

九一は主事として、スミは助手として実務を担ったのです。



芳川地区平和祈念式典

９月11日、同時多発テロから20年の日に芳川地区平和祈念式典が忠魂碑前で挙行されました。コロナ禍を踏まえ、規模を可能な限り縮小しました。アフガンをはじめ世界では戦禍は治まっていません。平和の大切さ、平和を守る決意を新たにしました。

芳川の今昔物語 第35話

～小屋から北を望む～

撮影：1960年頃か？

その昔……

小屋の大北から野溝方面を望む。手前に広がる畑と農作業する人たちが写り、野菜に手をくれてある棒は、細い木の枝である。

遠方には当時存在していた平地林が、その奥には城山丘陵の山並みがみえる。

現在は……

１９８７（Ｓ62）年から始まった県営緑農住区開発関連土地基盤整備事業により、小屋の田んぼが整備されて農業地帯となった。区画整理された広い田んぼには、大型の機械がフル回転して生産しており、平地林は消滅して農業用ハウスが建てられている。

撮影：2021年9月7日

たちばなし

二年ぶり夏の甲子園が開催されました。私も子どもの頃から野球小僧で、六十才を過ぎてもまだ野球小僧です。この年になっても野球の出来る体に感謝です。

この間、家族が私のプレーを動画にとってあり、見てあ然としました。なぜかと言うと、自分のイメージの中での全力投球が、キャッチボール、全力疾走が、駆け足のようでした。まだ若いつもりでいたのですが、同年代チームの試合では、みんなが同じスピードで違和感はありません。

また、その時代時代で野球を通して知り合った仲間、学生の頃は、クラブ活動での仲間、社会人になってからは早起き野球での仲間、家庭を持ってからは、子どもの野球を通して父母として応援をした仲間、五十歳を過ぎてからは、シニアチームの仲間とたくさんの人と出会いました。

このコロナ禍の中、なかなか集まることが出来ませんが、またその時代の思い出、プレーをさかなに「ワイワイガヤガヤ」と酒をくみかわしたいものです。